

ま る ま る
○○上伊那

平成27年7月3日

巻頭言：「つながる先にあるもの」～満足一番地域=上伊那～

伊那養護学校 伊藤 潤

上伊那圏域特別支援教育連携協議会が始まりました。と言っても、今のところ、「上伊那教育は一つ」の下、まずは「郡内の特別支援教育関係諸団体が一まとまりになる」を目指した、連携の前段階と言ったところです。本来、「連携協議会」が目指すのは「医療、福祉（行政）、教育」が厚く「つながり、相互作用しあう状態」ではないでしょうか。

ある福祉関係の方に言われたことがある。

「福祉が目指すのは、現状の維持・改善なんだけど、教育が目指すのは、育ちであり、成長であって、10年後の未来が目標になるのではないのでしょうか。（福祉から見て）その部分はちょっと羨ましいと感じたこともあるけど…。福祉の側から見て、その分、（教育が）やらなければならないもの・責任があるのではないかと強く感じることもある…」と。

障害児・者に長年、深くかかわってこられたこの方は、対岸の教育について児・者の姿を通じ、教育への思いが堆積し、こうした言葉となったのでしょう。入学から、卒業までの間、学校教育として、児生のこれから（未来）のことも含めて考えれば、山ほどやることのあるのに、十分やれているのか。卒業生の姿や診断の場面で、福祉・医療の方から見れば、「～やるべきだ」「この時期にこそ、これをやらないと…」と感じられていることもあるかもしれない。

「つながる」の先にあるのは、顔と顔がつながって、双方をより身近に感じて、互いのやるべきことを強く認識し、互いに反応し合い、自分の分野・守備範囲の専門性をより高め合うことかもしれない。教育で言えば、まずは、子供のためにつながって、できれば、通常級で、特別支援学級で、特別支援学校で、教育の目指す姿に沿ってその具体、つまり何を目指してどんな授業をしているのか、を福祉・医療関係支援機関によく知っていただく必要があると思います。そうすることが、同じ子どもを支援する機関として、その違いは違いで理解しながら、その違いを生かすことができるような連携支援構築につながると考えます。地域毎に福祉の有り様が違うのですが、もっと言うとその福祉の担当の方によってそのサービスは変わってきます。要するに、人の有り様が福祉・教育の有り様であると言っていいと思います。だから、連携協議会のテーマは「顔対顔（Face to Face）」なのです。

今後、制度化されたサービス利用計画や個別の支援計画の義務化等、ますます社会資源としての「情報」活用が求められます。それは、関係者とのチーム支援の効用を求められているからです。きっとこれからは…、

<～これまでは「あの地域には有名なA施設（学校）があるから託したい」「あの地域には○○さんがいるからお願いした」という、利用者からのラブコール。今でもそれが主流かもしれない。しかし、もう、これからは「あの地域は○○のシステムがきちんとしているから託してみたい」という地域にしてみたい。目指すは「満足一番地域=上伊那」。今はこうしてシステムを構築していく時期…。>

○○学校が、○○事業所が、でなく、『地域』で子どものことが考えられること、これが上伊那圏域特別支援教育連携協議会の一番の目標です。

上伊那圏域特別支援教育連携協議会アンケート結果

事務局：伊那養護学校 渡辺 孝次
伊那北小学校 塩入 健

アンケートに協力いただき、ありがとうございました。関係諸団体への要望及び連携協議会だけで解決できないものにつきましては太字にて記載させていただいています。このアンケートがただの読み物で終わらないようにしていきたいです。アンケート結果を受け、連携協議会として取り組む事項は後述してあります。

1, 教育現場の現状と課題

【連携】

- ・高等部在学中に授業としての現場実習だけでなく、本年4/1より就労アセスメントを行う必要があり、教育現場と福祉現場の密接な連携が必要となってきた。(伊那養)
- ・計画相談事業の展開により、相談支援専門員はじめ多くの外部の方々との情報共有が必要となってきた。(伊那養)
- ・支援会議モニタリングといった外部関係者を行う会議も急増している。(伊那養)
- ・関係機関との連携。 小中の連携が難しい。(小での学習の積み上げ?)
- ・医療関係とつながりたいがすぐ診てもらえない。医療機関が少ない。

【時間が少ない】

- ・空き時間がなく、教材研究・連絡帳記入・日記やテストの添削等の時間が無い。
- ・他の業務に追われ、原級担任や特コ先生方と子どもへの支援について十分な話し合いができない。
- ・様々なタイプの子もたちが入級(又はサービス通級)する中で、空き時間も全くなく教材準備に十分時間をとることができない現状。
- ・日々の活動の記録やケース会議の資料作りが大変。
- ・外部との対応(市の関係・スクールカウンセラーなど)が授業中に多くあり、授業に落ち着いて取り組めない。
- ・毎日雑務に追われて、特支の生単に向けての教材開発や、できる状況作りに時間をかけることができない。本来の授業にかけたい時間がない。
- ・今年初めて知障学級を担当し、コーディネーターにもなり、日々決められたことをやるのが精一杯。自分の教科の授業準備ができないことなど日々ストレスを感じ、こちらが不適應になりそう。とにかく会議が多く授業を自習にしなければいけないのが困る。

【教育環境】

- ・小学校自・情障学級担任ですが、学年の違う児童が年々増えてきており、授業がスムーズに進まず学力をつけることが難しくなっている。支援員もしくは介助員がほしい
- ・個々に合わせた指導の大切さはわかるが、個々対応を認めていくと職員の手が足りなくなったり、指導が入らない児童が出てくるので、学級としてのまとまりを作っていく指導も大切にしたい。
- ・個別対応が必要な子どもたちなので(入級児童)、数名集まると担任一人では対応しきれない。学習があまり進まず困っている。
- ・校内には個別指導をした方がよい子が何人も居ますが、特支学級は定員いっぱい受け入れる余裕がありません。入級するほどではないが個別指導が必要な子の行き場がない野が現状です。
- ・教室を飛び出す、原学級になかなか入れない、粗暴等、多様な実態の児童がおり1人では手が回らない。(伊那市)
- ・支援員を4名、村でつけてくれたが個別対応が必要な子が数名入学したので他学年の児童への支援まで手が回らないで困っている。(宮田村)
- ・子どもの人数に対し、1人で担任すると余裕がない
- ・9名の児童、4名の教員と介助士1人、個別対応、集団での活動が難しいお子さんが5名、慢性的な人数不足で、どうしたら充実した教育活動が行えるか職員皆で努力を重ねてはいますが、日々の悩みであります。
- ・人が足りない。
- ・介助員について、児童の実態に見合うように増員してほしい。
- ・支援学級に入級してはいないが、個別の指導を必要とする子が各クラスにいるため、TTとして支援員の要望が多いが全く足りない現状です。
- ・職員数が少なすぎる。生徒の特性が多様化しているため個別対応をしなければならない生徒も多い。また学年学級によって職員が1人で4人対応をせざるをえなく、支援がいきとどかない状況もある。
- ・自情障学級は通常学級とカリキュラムが同じであり、教科指導の比重が大きい。親のニーズも「少人数で手厚い学習指導をしてほしい」というような傾向が見られる。高校進学などを考えるとその願いもわかるが、やはりもう少し自立活動的な要素を取り入れた授業時数が確保できるといいと思うのだが・・・その点で、中学校でも通級指導教室をつくることはできないのかと思う。中学校での設置はかなり難しいとは思いますが・・・なんとかならないかなあ。
- ・施設の老朽化にともなう改修予算の不足(校地内の遊具も含めて)
- ・高等部では入試事務、入学オリエンテーションなど仕事量の負担も多い
- ・生徒の数が増え担任ひとりでは生徒一人ひとりに細かく丁寧に対応が難しくなってしまうこと。(院内)

【保護者対応】

- ・特別支援教育(学校)に対する保護者の理解が得られない家庭がある。
- ・拒否されて話ができない状況。
- ・思い描いている子どもの姿(期待して姿)が高すぎて、現実の子どもの姿をありのまま受け入れてもらえず、子どもに過度の負担やストレスを与えている保護者が数名いるが、話してもなかなかわかっていただけず、ズレを感じる。
- ・支援している子どもの実態でのばしたい力と保護者の願いがかけ離れていて、どう合わせていくことが子どもにとって一番良いかすごく難しく感じる。
- ・保護者をお願いすることがなかなか伝わらず、何度も同じ事を連絡していること。
- ・家庭支援の必要性。
- ・特別支援学級入級が適当と思われる生徒だが保護者の拒否で通常学級で苦しんでいる子がいる。どのように保護者への理解をとりつけていけばよいか。
- ・障害理解を保護者にどう行っていったらいいのか。
- ・保護者の困り感を引き出すのが難しい。学校全体の特支のイメージがあるのか。
- ・教室にいられない子の保護者が、支援学級に来ていることに理解がもらえない。
- ・保護者の願いが学力アップ・高校入学である。毎日家庭学習をさせ、本人にプレッシャーをかける、本当にそれが子どもの幸せにつながるのかわからない。保護者に広い視野と具体的な成長の姿を情報提供したい。
- ・保護者の支援が必要な家庭へもっと行政が入ってもらいたい。子どもに願う姿があっても、協力してくれる保護者がいないため、職員も困惑している。

【指導】

- ・地域の特性を生かした生単。 ・雨の日の生単。
- ・毎回教材を作るのが大変。また、興味もてる教材(ICT教材ばかり)の開発をしていきたいが . . .
- ・少人数なので、1人がわがままが出たり、やる気がなくダラダラしてしまうと全体の雰囲気そうになってしまう。
- ・どの児童にも新しい学習をなかなか仕組めない。
- ・少ない人数でも落ち着いて学習に向かえない子どもに対する学習支援。
- ・原級での活動ができている(原級での関係がうまくいっている)ので良いのだが、特支内でのつながりがまだまだという気がしている。(これからだと思いますが。)
- ・国語、算数に通ってきている児童への教材。どういった教材が良いのか困っている。
- ・時間割で原学級にいる時間が多くて、自立活動をする時間確保が難しいこと。国・算のみですので(6年)
- ・やはり一番難しいのは一人一人の自閉症などの障害を持った児生の指導です。それらの生徒の何をどう伸ばしていくのか、日々難しさを感じています。
- ・様々な学年の子が在籍しているので、個別の学習で教科学習を進めるのがうまくいかない。
- ・在籍以外の子が多数来ているので、(不登校気味、教室にいられないなど)今後どうしていくのがいいのか(在籍にするのか否か)
- ・教科学習をする上で専門教科以外の教科も教えることになり、生徒にとって学習が不十分になってしまうこと。(院内)
- ・家庭的に大変なお子さんに対して、どういった支援、どこまでの介入をしていいのか困っている。

【校内連携】

- ・支援の先生方と十分な打ち合わせができない。
- ・特支担任、原級担任、支援員、その他の職員で、その子への支援方針を統一してやっていくこと、そのために連携していくことがとても大変。

【意識・理解】

- ・教職員の支援に対する意識の温度差。 ・原学級担任との考え方の違い。
- ・特別支援教育を含めた障がい者を取り巻く社会の変化について、教職員へ理解・啓蒙を深めていくための手立て。
- ・伊那市は駒ヶ根市と比べると発達障がいに対する保護者の理解と対応が遅れているように思う。早くからSSTなどの手を打てば、入学後もっと早く落ち着けるかなと思う子が、結局2、3年生でようやく受診にこぎつけている。早くに周知し対応していただけるようにならないものか。

【進路】

- ・将来の進路について、保護者から相談を受けたとき、どこにつないだら良いか。

【その他】

- ・専門に学んだり経験したりしていきただけではない職員が担当するので、生徒の指導も保護者への対応も「これが最善なのか」と疑問に思うことばかりです。よりよい場をと求めてきた生徒や保護者の皆さんのためにも、学校や職員の体制をよりよく整えられるようにしたい。
- ・支援会議がなかなか建設的な話にならず、保護者の学校への要望を出す場となってしまうがち。なかなか対応しきれない。
- ・IQが境界線の場合の就学支援の方向
- ・WISCIV検査等をしたい児童が複数いて、子ども相談室に相談してやって頂いているが、無理をして頂いているようです。検査をして下さる機関、人を求めています。

2, 知りたい情報・学びたいこと

【児童理解・指導・支援】

- ・通常級の中での支援の仕方。
- ・LDの子どもへの指導の具体について
- ・今後、特別なニーズを持ったお子さんが増えていくことが予想され、普通学級でも特別支援が必要になってくると思います。普通学級の中で、特別支援をどう生かしていけるか学びたいです。
- ・読み書き障がいの児童への支援の仕方を具体的に学びたい。
- ・自・情障の子への対応 ・自閉症の子の指導
- ・マンツーマンではなく、複数名での教科書に沿った学習をどのようにやっていけば良いか。自立活動を同じ時間にどのように入れていくのが良いか。効果的な方法。
- ・自・情障学級での具体的な支援の方法（内容、ルールの決め方、学習等の継続習慣のつけ方、進路）
- ・繰り返しの学習が困難な子に対しての有効な教材
- ・緘黙の子どもへの支援のあり方。多動の子どもよりおとなしい分、見過ごされがち。専門の先生がいらしたらいろいろ教えて欲しい。
- ・他校で行われている自立活動の内容を子どもたちの実態に照らし合わせて知りたい。
- ・他校での特別支援学級の運営の仕方、通常級への通級の度合い、進路指導
- ・個別の支援計画について
- ・ことばの発達
- ・発達検査の種類、方法、結果の見方
- ・ITの利用
- ・職員の専門性。これだけ多様な中で、「今必要な専門性は何か」「上伊那の現状から、何を学べばいいのか」方向性があるとありがたい。

【保護者支援】

- ・WISC-IV 保護者対応のノウハウについて（流れ・キーワード・NGワード）
- ・支援会議の効果的な持ち方。多忙な中でも大切にしていきたいので事例があれば知りたい。

【制度・施設】

- ・障がい福祉制度の内容や地域の福祉関係施設の実情や課題など。
- ・各サービス事業別の施設情報、特に定員や現在の利用者数の最新情報が知りたい。
- ・放課後等、児童デイなどの仕組み。
- ・療育手帳はじめ、自治体の支援制度について
- ・余暇支援について、やっている法人や内容、肢体不自由の子どもが参加できるか等
- ・療育手帳、精神の手帳の活用、所持していることのメリット
- ・福祉サービスについて、保護者に勧められる程度には知りたい。
- ・就労へのつなぎを明確に。（高等学校）
- ・合理的配慮について。（高等学校）
- ・福祉施設や福祉行政のことについて。せっかく一般の企業に就職してもやめてしまったり、長続きしない話も聞きます。行政等が卒業後もどう支援していくのか聞きたい。

【進路】

- ・特支入級児生の進路
- ・中学校特別支援学級卒業生の進路
- ・高等学校の受け入れ状況（郡内に限らず）
- ・高等学校での特別支援はどの程度行われているか。
- ・高等部、高等学校卒業生の進路
- ・特別支援学級の生徒の進路と卒業後の就労状況
- ・伊那養高等部なので、進路のことをもっと学びたい。古田先生の話。
- ・卒業後の進路、就労について
- ・特別支援卒業後生の自立した姿、本人の声（何が生きる力となり、何が支えとなっているのか）

【連携】

- ・伊那養のセンター化をどう利用したらよいか。
- ・学習の場が病院内にあり、上伊那全域から生徒を受け入れているということで、所属校とのつながり方や原籍学校との連絡の取り方など、同じ院内学級がある駒ヶ根東中学校と情報を共有できればありがたい。（院内）
- ・医療機関との連携の仕方。（具体的にどのようにしていくか。）
- ・どのように医療へとつなげ、そこで連携していくか。
- ・専門医が少ない。どう連携していくか。だれに、どこに、すすめてらよいか。
- ・他分野の方々との連携。教育の分野が主張できる強みは何か。（福祉、医療。行政にはできないこと）
- ・WISCなど発達検査はどこへ依頼すればいいか。伊那養は他の学校にどのような支援をしてくれるか。
- ・小学校でつけた力をそのまま中学校でも活かして更に伸ばせるような、スムーズな移行支援ができるといいが、初期抵抗が強かったり障害の特性が強かったりすると、どう指導支援していったよいか悩んでしまう。また、中学校3年間は短いし高校進学を考えるとこのままでいいのか・・・と焦ってしまう。そんな時、小学校からつながっている医療の方々からアドバイスをいただけるととてもありがたい。担任は替わるけど主治医や心理士はそのまま・・・ということでその子を継続的に見られると思う。
- ・相談できる機関、人材、サポート体制

3. 圏域・市町村規模で課題と感じていること他

【特別支援教育連携協議会】

- ・今年が1年目ということで、連携による課題が出てくると思う。
- ・予算の配分。各団体の規模や財源にも差があるが財源のないところは確保する方向を探っていく必要がある。
- ・役員の出し方。同じ人が2つの会をもつことがないように、みんなで分担しながら運営していく。そして、それぞれが運用していくが、その報告のあり方、情報共有のあり方を工夫する。

【研修・情報共有システム】

- ・それぞれで活動している中で、良い取り組みや方法などを地域で共有できるようなシステムがあると良いと思う。諏訪圏域や北信のような体制ができていくと良い。
- ・福祉関係施設の現況が誰でもすぐを知ることができるシステムの構築。(新しい情報をタイムリーの変えて、常に最新の情報がわかるようになるといい。)

【貝才政・時間・人員】

- ・各団体で中心となって連携を進めていくコーディネーターの連絡・調整にかかわっての時間や予算の確保。
- ・市町村によって支援の先生の数、予算が違いすぎる。
- ・特別支援学校判定でも保護者の希望で普通学校に通学している児童に介助員はつくが、他の児童との差が大きく個別対応、またその子だけに介助員が掛かりつきりにはなれないし、高学年になるとつかなくなり、担任の負担が大きい。また、居住地校交流で地元の学校に複数回通ってきたいという願いがあるが何かあっては困るので、やはり介助員が付いて欲しい。必要に応じた介助員の増員や、それなりの予算があってインクルージョン実施に通じると思う。
- ・配置されている介助員が任期が決まっており、次までに一定期間間を開けなくてはならない。現場で養ってきた経験を継続して生かせるようなシステムであってほしい。(伊那市)
- ・「お金は出せないが現場で工夫を！」という論は、ますます職員を苦しめることになる。読み書きの指導にしても推進教諭を指名することでさらに負担につながる。教育にしっかりと予算を確保し、先生方を支えていける支援体制を進めてもらいたい。(伊那市)

【連携】

- ・小中の連携。特支学級、特に自情障の子たちには中1ギャップがとても大きい。中学の先生にもっと小学校を見に来て頂きたい。
- ・言葉やLD等通級指導教室のような横のつながりが院内学級職員に不足している。
- ・連携マップなどにより、保護者・学校がどこにつながるのか、一目でわかるとありがたい。(高等学校)
- ・連携に関わって、その意を理解していない教育長レベルの人がいる。(浸透していない)
- ・高等学校と連携をはかっていたいが・・・
- ・きらりあさんとの連携
- ・地域の中でのネットワークづくり。
- ・人が多すぎて顔が見えない。就学支援委員も校外の方に見て頂く事が大切だと思うのに、町村ごとに委員会があるのに校外の方に見て頂けない。(飯島町)
- ・地域によって福祉的就労施設の数が偏っているのか、保護者、生徒のニーズに対応できていないことをもっと行政でかかわって整備をすすめて欲しい。

【社会環境】

- ・障がい福祉施設で就労移行支援事業所や生活介護施設の不足。
- ・医療的ケアを必要とする生徒の卒業後の生活・活動の場の確保が難しい。

【その他】

- ・普段、学校、学級担任の特別支援に関する知識理解を進めていく必要を感じます。
- ・養護学校がどういふところなのか職員も保護者も知らなさすぎる。だから知障の子の将来の進路としてどの段階から養護学校をすすめればいいのかわからない。どんぐり祭り以外に特支学級、保護者向けの伊那養公開・説明会があるといいと思う。
- ・特別支援学級の先生が日々困っていることを、学校をこえて相談したい。学校を通してと言われるので。
- ・人が変わることによって支援体制まで変わってしまうことがあるので、組織として支援体制がかわらないような仕組みができるといいと思います。
- ・特コを含めた、校内での中核となっていく人材の確保(学校間の差が大きい)
- ・人が変わる中で、立場が変わる中で、子どもたちの情報を安定的につなぐこと。また、連携していくために、互いの役割を理解すること。どちらも「情報共有」という言葉だけで簡単に片付けられない取り組み、仕組みが必要だと思う。
- ・特別支援卒業後生の自立した姿、本人の声(何が生きる力となり、何が支えとなっているのか)を子ども及び保護者に発信。
- ・地域によって、発達障がいの理解に差がある。(中川村)
- ・地域で障がいをもつ子を含めて多様な子がいることをわかっているようでわかっていない。啓蒙していけると良い。(宮田村)
- ・キャリア教育の視点で誕生から卒業後以降まで支援し続けるシステム作り。

アンケートの結果を見ると、教育現場内での更なる連携の必要性を感じさせられるとともに、「教育」だけでは限界があることも感じさせられます。だからこそ、「教育」だけでなんとかしようと思わず、様々な方々との協働を大切にしていきたいと思えます。また、協働することで広がる可能性を模索していきける1年にしていきたいと思えます。よろしくお願ひします。

そんな流れを受け、今年度の動向は以下の通りとなります。単年度でできるものと、複数年かかるものがありますが、確実に前進していきたいと思えます。

教育課程研究協議会について

期日・会場

平成27年10月14日 水曜日

会場：伊那東小学校 ※詳細な日程は未定

AM：授業会場の関係で人数制限有り PM：可能な限り受け入れたいが、駐車場の関係で相乗りに協力していただきたい。

午前の研修 授業研究会

研究テーマ：どの子ども「わかった・できた」と感じる授業づくり

～個別の指導計画の「可能性の芽」を行かした授業構想を探る～

| | | | | |
|------|--------|------|------|-----------|
| 公開学級 | 低学年部会 | 2年桐組 | 学級活動 | 授業者：中嶋 清治 |
| | 中学年部会 | 3年杉組 | | 授業者：安藤 優衣 |
| | 高学年部会 | 5年柏組 | 家庭科 | 授業者：牛山 明彦 |
| | 特別支援部会 | 落4組 | | 授業者：宮木 萌 |

午後の研修① 県教委からの説明

午後の研修②（構想段階ではありますが）

【I部】テーマ「正しく知り合い、確実につながる」 **全員共通**

- ①上伊那圏域障がい者総合支援センターきらりあについて
- ②発達障がいサポートマネージャーについて
- ③上伊那圏域地域自立支援協議会について

【II部】テーマ「幅広いニーズに応じて」

選 択 性

- ①自立支援協議会各部会の動き・課題
療育部会 権利擁護部会 就業支援部会 重心・要医療的ケア部会
- ②情報交換会「生単どうしていますか？」 知障
- ③情報交換会「自立活動どうしていますか？」
- ④短時間で行える発達検査

上伊那圏域連携サポート会議について

関係団体の方々にとって参加しやすい、集いやすいことを最優先に考え、土曜日開催にします。

※開催通知は発送済みです。参加申し込み及び事例の受付は7月10日までになっています。参加をお待ちしています。

期日・会場 平成27年 8月 1日 土曜日 会場：伊那養護学校

午前中は「上伊那で子どもの情報をつなぐ」をテーマに医療・福祉・行政・教育からのパネル発表及びパネルディスカッションを行います。

午後は、事例研究会になります。事例研究会では助言者として、伊那中央病院・県立こころの医療センター駒ヶ根・上伊那圏域障がい者総合支援センター「きらりあ」より協力を得ています。連携のあり方を模索しながら事例を検討できる貴重な機会となっています。

昨年度までは教育諸団体の共催で行われていましたが、これからは圏域のみなさんと協力して、協働について考え合う場へと創造していかれたらと願っています。参加して顔を合わせて、声を出して、とによりよい場としていきましょう！よろしくお願ひします。

その他の動き

新たなヨコのつながり

「院内学級間で情報共有できたらありがたい。」という声がありましたので、中部地区代表特コと南部地区代表特コ間で調整を行い、「院内学級担当者会」の開催に向け動き出しました。今年度は、それぞれの場へ1回ずつ訪問し、日頃の取り組みや課題について情報を共有していってもらえたらと思っています。

平成28年度に向けて

先日行われた中高特コ会で高等学校の先生方から「差別解消法・合理的配慮について知りたい」という声をいただきました。

平成28年4月1日より施行される「差別解消法」

施行に向け、合理的配慮とは何か？基礎的環境整備は何か？を理解をしたうえで準備を整えなくてはならない今年度。早急に研修会を開催したいと思います。決定次第、通知を発送します。

連携ツールの作成

○メーリングリストの作成に着手

連携のために会議や研修会を行おうと思っても、それぞれの団体のもつメーリングリストが完璧ではないため、お互いのネットワークを活かし合ったり、郵送したりと業務が煩雑になってしまう場面が多々ありました。また、立場が違くと勤務形態も違うため、電話をするタイミングが難しかったり、なかなかつかまらなかつたりといったことを経験したことがあるかと思います。そんな煩わしさを解消し、よりつながりやすくしていけたらと思います。経費も節減でき、一石二鳥です！

ホームページ上にメールアドレスが記載されていない場合は、掲載の可否も含めて調査をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

○連携マップの作成に着手

「どこにつながったらいいの？」「窓口は？」「どんなことをしてくれるの？」・・・『連携』と一口に言ってもなかなかうまくいかないのが現状。漠然としたマップではない、組み合わせが見えるファミレスのメニューの様な連携マップがあったら・・・まだまだ言葉尻だけの段階ではありますが、そんな使えるマップをつくっていきたいと思っています。

○個別の支援ファイルについて（療育部会より）着手中

昨年度からの取り組みになります。各方面の方々からのご意見を参考にし、基本枠を完成させました。今年度は、実際に書き込んでいただいて改良を加えていくところです。また、保管のあり方・扱い方を含め、どう周知していくかを検討した上で、平成28年度に導入と考えています。

相互研修システム確立に向けて

「諏訪圏域のように郡内で研修できるシステムがあったら」という声がありました。

後述の伊那養護学校発の出前研修システムの他に、様々な立場の方々とともに学んでいかれるシステムの構築に着手しました。地域の課題は地域で解決する・・・地域内で質の向上を目指す！そんな上伊那を目指していけたらと思っています。

特別支援教育〇〇上伊那第22号予告

次号では、以下の内容を予定しています。アンケート結果をふまえ情報提供を中心にお届けしたいと思います。発行予定は平成28年1月28日の予定です。

- ・今年度の動きで見えてきたもの
- ・進路について
- ・各種手帳のメリット及び取得方法
- 他

※この「〇〇上伊那」は、義務教育現場からの一方的な発信で終わらせたくないと考えています。連携していく上で、「ここは知っておいてもらいたい！」といったことがありましたら、連携協議会事務局までお知らせ下さい。お待ちしております。

上伊那圏域特別支援教育連携協議会 事務局

伊那養護学校 渡辺 孝次

TEL : 0265-72-2895 FAX : 0265-76-9095

E-mail : inayo-sc@pref.nagano.lg.jp

伊那北小学校 塩入 健

TEL : 0265-72-2264 FAX : 0265-72-6029

E-mail : inakita@ina-ngn.ed.jp